



荒びゆくこころの臺朴の花
 雪溪の小さしよ樺美智子の忌
 ズブロッカ含む青野を風渡る
 蝶とまる葉っぱに窓のあるごとし
 かがり火をたきあひ本土復帰の日
 明易や何かをはらふ今際の手
 星までの時間をはかる蝸牛
 滴りの途絶えて数へきれざる死
 緑の夜夢は記憶を編む解
 塩のごとざらつく雨よ慰霊の日
 角打のこなから響る桜南風
 草笛や斯くも遥かな未来に
 踊る女動かはず花海芋
 ががんぼのぎこちなきゆゑ干戈なく
 *
 振花に無限空間ひとつづつ
 岩井かりん
 清水道径
 満田光生
 田中純子
 宮岡光子
 上村敦子
 海野恵子
 篠遠良子
 樋上照男
 芳川莞久子
 松本よし乃
 柁木幸子
 田添博美
 小池孝雄
 長尾裕美子

たまご焼つまむ刹那の稲光
 和顔施の心なんぢやもんぢやの花
 降るほどの後悔ありぬ心太
 剥製のシーラカンスや暑氣払
 悲しみの水湛へをる四葩かな
 朴咲くやいまがわたしのルネサンス
 水尾の灯を蹴りて鵜飼の絵がらみ
 夥しう船形石に虎耳草
 青大将吐息といふをまだ知らず
 夕風の築守涅く目の光る
 一瞬の電蒿苣の畑全滅す
 水中花水に殺意のありにけり
 松根つこ掘り出し夜振いざ行かむ
 六月やばりばり草を食む真鯉
 バットになる夢あおだもの花盛り
 曾根原とうこ
 栗原利代子
 太田 薫
 二木 暖
 土橋たか子
 依田ひろ
 広枝千鶴子
 佐藤きく
 垣内みか
 若尾伸子
 渡辺 光
 倉科繁登
 下島 健
 児玉君子
 金入智子

巻頭言 諏訪支部の吟行会がこの七月十四日、下諏訪地域で行われた。諏訪下社春宮から秋宮を参詣した。「神さま」をどう詠えるか課題だった。神さまは目に見えない。思い出すのは、飯島晴子と「写生をめぐって」の座談会（『鷹』昭和五十八年六月号）をやった時に、晴子が言った言葉である。「見えないものを捉えよというけれど、見えないものは見えるものの裏に在るものだし、見えるものだけじゃなくて見えないものがその裏になきゃだめなんだし、表と裏の関係であって、それを捉えないとね」と言われた。四十年前のことをいまさらながら、反芻した。見えるものとはそういう関係を感ぜさせることだ。

葉っぱの窓に蝶が止まる——ただ葉に止まるのではない気付き

蝶とまる葉つばに窓のあることし 田中 純子

細やかな気付きが暮らしを明るくする。軽い表現が現代風であるが、葉に蝶が止まることへのなぜという問いがあった。卵を産み付けるなどという自然科学者の眼ではなく、「窓」を連想したのが作者らしい。詩人風な入り方であるが、ここには俳句入門への巧みないざないがある。暮らしに「窓」を開けましょう。一行ここに書くために、荒井良二『あさになったのでまどをあけますよ』を探した。二冊も絵本を買って、それが二冊とも行方不明。あの荒井の迫力が恋しい。「窓」「窓」「窓」の気分を確かめるために絵本がいる。手元には『New born』（いつもしらないところへたびするきぶ

る。世界の酒に詳しい作者。私などは、そういうものかと納得する。実感を伴った言い方ではないが、イメージは湧く。北欧への憧れが鑑賞を支えている。

かがり火をたきあひ本土復帰の日 宮岡 光子

沖繩の風土が素朴に伝わる。五月十五日は沖繩が本土へ復帰した日。一九七二（昭和四十七）年、今から五十二年前である。沖繩と日本本土とがまさに篝火を焚き合う祭である。沖繩を戦場にしたのは本土である。政府はそれに見合う配慮をしてきただろうか。上掲句にはそんな思いが底流にあるう。

塩のごとさらつく雨よ慰霊の日 芳川莞久子

沖繩慰霊の日は六月二十三日。沖繩戦が終結。悲惨な戦いを暗示し、その日に降る雨を「塩のごとさらつく雨」とは犀利だ。塩辛い雨とは人間の体から絞り出した塩のような雨。

星までの時間をはかる蝸牛 海野 恵子

夕方、星が出る。雨上りだ。それまでの午後の時間を図るのであるうか。星座までの距離の意ではないであろう。どこかロマンがある。七夕近い日常がふと連想される。

滴りの途絶えて数へきれざる死 篠遠 良子

今月の秀句

明易や何かをはらふ今際の手 上村 敦子

はっとする。この世からの最後に何かを払いのける無意識な手の動作。無限の世界へ入る儀式であろうか。明易が鋭い。

んだった）がある。横須賀美術館で昨年八月開かれた良二回顧展の大冊である。半日、良二の『ぼくの絵本フィールド』を彷徨った。俳句鑑賞には日常の彷徨いがないと賑らまない。

荒びゆくこころの臺朴の花 岩井かりん

折るような句である。私のように何ごとにも「なんとかなるさ」式に生きている者には怖ろしいほど迫る。純白な朴の花が裏側に在る「見えないもの」を見せてくれる。「臺」とは蠟が溜まる燭台の如きか。「こころの臺」揺るがない言葉だ。

雪深の小さしよ樺美智子の忌 清水 道徳

一九六〇年六月十五日が忌日。新日米安保条約改定反対の全学連学生運動の最中にデモ行進の渦中で圧死。東京大学文学部史学科四年生であった。誕生日が一九三七年十一月八日。私が四日早い生まれと、変なことを記憶している。作者も同じ世代。次第に忘れられていく歴史の残酷な必然を高山の雪溪の小ささで表現したものか。私事を記す。

遺稿集『人しれず微笑まん』（二一新書）が手元にある。

娘が死んだ今、なにも語りたくないと樺俊雄先生が書かれた気持がわかる。「時代の子であった」と書中にぼつり言われた言葉が消えない。縁といえ、先生が集中講義の家族社会学の教授であり、いつまでも静かな印象が消えない。

ズブロッカ含む青野を風渡る 満田 光生

ズブロッカとはポーランドを代表するウォッカ。聖なる草「バイソングラス」が独特な香りを生んでいる。清爽感があ

深い句だ。山の滴りが途絶える。その滴りによりいのちを繋いでいた生物が沢山いたはずである。一滴の水の存在がいかに貴重か。「見えない」世界への想像が鮮やかに生かされている。まもなく句集を出す。精進の日々が見える作者。

緑の夜夢は記憶を編む解 樋上 照男

知性が光る。ひたすら地味に、それだけに手堅い。素晴らしい俳人である。本拠は大阪。安曇野にも家がある。本業の化学者として、その往復を楽しむ。まさに「解」に夢を乗せて。時は緑豊かな季節を迎える。高齢になると夢もまた深くなる。不思議な夢は記憶が生み出すのであろうか。

角打のこなから響る桜南風 松本よし乃

「角打」は酒屋の店先で一合枧に口をつけて飲むこと。「こなから」は二合五勺、少しばかりの意。折から桜南風がやんわりと身を包む。いい気分だ。かつて本誌には小原俊一という酒飲みがいた。大野林火「浜」に所属時代、角川俳句賞に何回も挑戦。次点まで行ったがついに断念。「鷹」に入り、「岳」で活躍。同人会長も務めた。今頃は他界で、にやにや、ちびりちびりやっているか。同じよし乃の（一陣の雨の植田の田のかんさあ）にも注目した。宇和島在住の作者、「田のかんさあ」は「田の神さま」、道祖神の意。鄙の言葉のやさしさが桜南風の風情に通じる。

草笛や斯くも遙かな未来に 榎木 幸子

草笛の音色に乗せられいい気分を「斯くも遙かな未来」と称したものか。あるいは、過去から見た現在か。表現が自在なところが秀でている。ぐんぐん上昇、熱心な作者。

踊る女動かず花海芋 田添 博美

「せくぐまる」は背を前にかがめる意。浜辺であろうか、海芋の花が咲く。私は先日、横須賀で白い海芋の花を見たばかり。花言葉は華麗な美しさとか。色により花言葉もいろいろ。上掲句には「兄死去」と左注が付されている。死者を悼む姿勢。

かかんぼのぎこちなきゆゑ干戈なく 小池 孝雄
かたんぼの動きでは匍匐前進も叶わない。兵隊検査失格。戦争向きではないのであります。詩人の金子光晴のように、息子の金子乾を徴兵忌避するために、松葉で燻して肺病患者に仕立てなくてもいい。着眼に詩情がある。

振花の密かさへの無限の夢―自然の摂理への信頼感

振花に無限空間ひとつづつ 長尾裕美子
草原や芝生にひっそりと立つ振花。知らないし気付かない地味な花である。しかし、花は螺旋状に米花のような花序が伸びる。花は小さくても、そこから空間が広がる。曖昧ではない。作者の目指すものへのささやかな応援歌が一句になった。

今月の秀句

たまご焼つまむ刹那の稲光 曾根原とつこ

夕方の食卓風景であろうか。卵焼を箸でつまもうとした。途端に窓外の田の上に稲光が走った。豊作の予兆のようだ。盆近い穏やかな日常の句である。ささやかな詩心の閃き。上田地域の二十台半ばの新人。初々しい。田中純子門。

陽花の毬が付く。不思議な年だ。

朴咲くやいまがわたしのルネサンス 依田 ひろ

人生に一度は高調子の自分を讃えたい時がある。俳句ばかりでなく、もろさわようこに共鳴しての、地域に根付いた女性史研究活動の充実など注目されている。市川房枝の思想に賛同した人権運動は今日の時代社会の骨組みを作りつつある。掲句には格調と気品がある。他に、〈未だことは持たぬ身の渦白牡丹〉にも感動の根源を大事にする意欲がある。

水尾の灯を蹴りて鶴飼の総がらみ 広枝千鶴子

豪華な句だ。鶴飼の総がらみとは最高の見せ場。「水尾の灯を蹴る」という迫力に圧倒される。この表舞台の背後に「見えないものさみしさ」がある。芭蕉の句ではないが、読み手への暗示力が秘められている。作者のもう一つの顔である陶芸家の心情が籠る。

夥しう船形石に虎耳草 佐藤 きく

貴船神社奥宮にある船形石詠。玉依姫神話で名高い。長さおよそ十メートル、外周部一回り二十四メートル。そこに雪の下がびっしり繁茂する。見るべきものを見た手応えがある。堅実。

青大将吐息といふをまだ知らず 垣内 みか

青大将を見た瞬間の驚きを表現したものか。迫力がある。四国の四万十での地道な活動は、ご主人の亀井雉子男さんの堅実な活動とともに、つねに注目している。句に感動を生み出す作爲がないところがなかなか巧み。

夕風の築守渥く目の光る 若尾 伸子

上田の作者。地味で堅実な捉え方に感銘した。千曲川の築

た。「無限空間」という宇宙感覚の発想が雄大だ。

和顔施の心なんぢやもんぢやの花 栗原利代子

ここにこした顔で会うと、なんじゃもんじゃの花、ひとつばたごの花もここにこ。「和顔施の心」は日常の穏やかな平常心の大切さをいう。心が顔に現れるもの。難しいことよまず実行。俳句精神の言葉遣いの核心は「和顔施の心」。

降るほどの後悔ありぬ心太 太田 薫

どんな後悔か。失敗したと思ったのであろう。気がついたがもう遅い。やたら心太を食べた。表現しているほど読後は暗くない。腹の足しにならない心太を我武者羅に食べるとは、むしろ快活な句ではないか。そこに惹かれた。

剝製のシーラカンスや暑氣払 二木 暖

暑氣払のビールを飲んでいるところに古代の怪物魚シーラカンスの剝製が飾ってあるものか。意識すれば、意外や意外となるが、ここは平穩そのもの。四億年前からというから気が遠くなるが、気にしていない。さしてどうということもなく、淡々と飲んでいられる。句は律儀な詠み方なのが大物風情。内面に踏み込ませない寡黙な構成が手堅い。

悲しみの水湛へをる四葩かな 土橋たか子

作者は諏訪のりんどう俳句会に長く在籍している。現代を見据えた、しかも重厚な作がある。本誌には初登場である。四葩は花卉四枝、紫陽花の別称。水を湛えた花とは梅雨どきの花だけに珍しい言い方ではないが、花そのものに、「悲しみの水」を湛えているとは一度いっておきたい思いがあろう。杉田久女はじめ多くの女性が思いを託している。わが家には鈴木湖愁から、かつて沢山の新種を買った。今年はやたら紫

守の印象が残響のように消えない。瀬音も聞こえる。

一瞬の電高首の畑全滅す 渡辺 光

南佐久郡川上村在住。これは言葉で失う哀しみに天を仰ぐのみ。柔に剛の凄まじさ。人間は永遠に無力である。

水中花水に殺意のありにけり 倉科 繁登

じっくりと生殺し。瞬間を捉えるならば「殺意」。鋭い。これは俳句の型として見事な作であろう。能村登四郎門下としての長い作句経験が背景にある。

松根つこ掘り出し夜振いざ行かむ 下島 健

少年の日、天竜川での夜振り体験詠。乾燥すると、松の根にはテレビン油などの油がある。松明に用いた魚獲りか。

六月やばりばり草を食む真鯉 児玉 君子

見えるものをしっかり捉える。手本の句である。鯉も胃洗浄をしたい真夏。手近な自然の活力を見せられた作。

バットになる夢あおだもの花盛り 金入 智子

あおだもの木は野球のバットになる。歳時記の解説風であるが、その花に注目したことでも一抹の楽しさがある。

他に推薦候補作をあげる。

逝くときをふと思ひたる夏の海 若月 行人

明日を追ふことの如くに虹懸る 三品 史紀

噴水に触れて私は光の子 原田 宏子

白南風や走りて僅か身の浮き来 高橋 洋子

芍薬よここに光を寄すること 谷口とし子

炎屋や銀座の柳そつげなし 若月はつ江

薫風が鉦の通りよくしたる 成保 房子